

保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅱ

－ シルバーリング制作を導入した造形指導の実践的研究 －

佐 善 圭

岡崎女子短期大学研究紀要44号 抜粋

平成23年3月1日

【研究論文】

保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅱ

－ シルバーリング制作を導入した造形指導の実践的研究 －

佐 善 圭*

要 旨

本稿は、平成20年度に文部科学省より採択された「各大学等の特色を活かせるきめ細かな支援（教育・学習方法等改善支援プログラム）、課題名：『感性豊かな保育者を育成する造形教育拡充プログラムの実践的研究（研究代表者佐善圭）』の一プログラムとして、岡崎女子短期大学幼児教育学科の「造形」授業に、「シルバーリング制作」の課題を3年間導入した実践的研究の成果である。検証と考察を基に、保育者養成に関わる短期大学における造形美術教育の一視点を明らかにする。

Abstract

Along the education and learning method improving assistance program adopted by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, the "Art and Design" class, the Child Education Course of our junior college, had tried the "silver ring formation" assignment for three years. This paper verifies the action research and examines the results of such trial to clarify a point of view of the art and design education in care provider cultivating at junior colleges.

I はじめに

岡崎女子短期大学（以下本学）幼児教育学科の美術研究室では、平成20年度から入学当初の学生に対して美術に関する質問紙調査¹⁾を実施している。平成22年度の調査では「美術に苦手意識を感じる」と回答した学生は66.6%も存在し（平成21年度調査、64.2%、平成20年度調査、68.0%）、「いままで学校での美術・図画工作において、創造の喜びや作品制作の充実感を感じることがなかった」と回答した学生も49.4%に達した（平成21年度調査、48.8%、平成20年度調査、52.0%²⁾）。

筆者は本学着任以前に、主に美術大学などで専門分野である造形や彫刻を指導するという立場にあつたため、大学では自らの造形表現を模索し、悩み苦しむ学生の姿を目にすることはあっても、創造の喜びを知らない学生や、まして、美術そのものに苦手意識を持つ学生が、上記のように多数存在することなど思いもよらないことであつた。

山崎猛・金子一夫らによる「児童・生徒の美術教育の意欲・意識の基礎研究(1)」によれば、小学校低・中学年では図画工作に高い意欲度を示すのに対

し、中学生ではその意欲度は半分以下になるという調査結果³⁾や、さらに平成10年の「学習指導要領」改訂以後、小中学校における図画工作教育・美術教育の「時間数削減」状態は継続し、多くの教師が学校現場での授業時間不足や多忙を自覚する中⁴⁾、榎英子が著書に「私たちがまず学ばなければならないのは、表現の技法ではなく、表現を引き出し、尊重し、共感し、その楽しさを共有できる心と身体の在り方⁵⁾」だと記しているように、今後、保育者となる学生が、基礎技能科目としての造形美術教育から学ばなければならないのは、広範な専門的知識をはじめ、保育の現場に即した美術的な技法や手順の修得は勿論のこと、最も重要とされるのは「『創作することの楽しさ』、『表現することの素晴らしさ』などを体感し、子どもの喜びに共感できる豊かな感性を身につけること」であろう⁶⁾。

特に本学のような保育者養成校の短期大学生は、2年間ないし、3年間という短期間で、子どもたちの豊かな造形活動を支援する責任ある立場となる。そのため短期大学において美術科目を担当する教員は、入学以前の美術に対して苦手意識を感じ、学校教育の中では創造の喜びを味わうことができなかつ

* 岡崎女子短期大学幼児教育学科

た学生に対しても、造形美術の新たな試みを提示することで認識を改善させ、造形美術に苦手意識を持たない保育者として育成する義務があるのではないだろうか。

そのために筆者は、平成20年度の本学「造形」カリキュラムのひとつに、①苦手意識の強い絵画手法の課題から離れた立体制作。②多くの学生が今までに触れたことのない素材。③作ることに楽しみや喜びを見出し、達成感を存分に味わうことが可能な演習。を念頭に、いくつかの課題案を考案した。

最終的に導入することになった「シルバーリング制作」は、小振りながらも造形の醍醐味を味わうことのできる立体制作課題であり、その造形美ゆえ「小さな彫刻」とも呼ばれているものである。普段体験することのできない、本格的な宝飾品としてのシルバーリング制作は、本学の女子教育にも通じ、さらに、作品に愛着を持って接することで、保育の現場でも必要とされる、物を大切に作る心も育まると判断し採用することにした。

これは槇が述べるところの「その楽しさを共有できる心と身体の在り方」⁷⁾を自らが感じ取り、人間本来が持つ、ものを創るといふ楽しさの本質を体感し、興味を持って学修することが可能な総合的課題と考えたからである。

これから、授業実践の内容を記すと共に、授業後の質問紙による調査結果を検証していく。

II 教育環境

本学での「造形」は、幼児教育学科1年次の通年専門科目として設置され、卒業、幼稚園教諭免許状および保育士資格の必修取得単位となっている。

幼児教育学科には、通常の短期大学課程2年制の第一部と、昼間二交替制3年制の第三部が設置されており、平成20年度は、第一部入学者232名、第三部88名、平成21年度第一部入学者229名、第三部61名、平成22年度第一部入学者238名、第三部は89名の在籍学生で構成され（各年度5月1日の在籍学生数）、各年度共に第一部6クラス、第三部2クラスの合計8クラス編成となっている。

美術専任教員は筆者1名のため、平成20年度は筆者が第一部を3クラス、第三部を2クラスの合計5クラスを担当し、2名の非常勤教員が3クラスを指導した。平成21年度からは、筆者が第一部を2クラス、第三部を2クラスの合計4クラスを担当し、2名の非常勤講師が4クラスを指導している。

III シルバーリングの制作方法について

1. 金属工芸の加工法

シルバーリングの制作は、工芸領域の金属工芸（金工）に分類され、通常それら金工は、「彫金（ほりもの）」、「鍛金（うちもの）」、「鑄金（いもの）」の3種に細分されている。また、これらの技法の他に、近年開発された「純銀粘土」が、新たな素材として注目されている。

それぞれの加工法や材料の特徴を見ていくと、「純銀粘土」は、1992年に純銀の微粉末と固着材が混合された粘土状態の素材として新開発された。成形後は家庭のガスコンロなどでも焼成可能なことから、手軽にシルバーリングが制作できる画期的な商品と脚光を浴び、メーカーによる普及活動などから愛好者が増加している。しかしながら、発売当初の製品を筆者が体験したところ、焼成されると極めて純度（99.9%）の高い軟質な銀に変化するため、実用強度が求められる宝飾品には向かず、また、割高な材料のため、教材として採用するのは難しいと感じた。

一方、古くから伝承されてきた「彫金」は、鑿（たがね）と金槌で金属を彫ったり、打ち出したりして装飾する技法である。彫金は宝飾品制作の中心的な技法ではあるが、加工には多種多様な専用工具が必要となり、自在な制作には難易度の高い溶接技術の習得が欠かせない。同様に古来からの技法である「鍛金」は、金属に熱を加え、槌（金槌）で叩くことで加工する鍛冶仕事などに見られる絞り加工の技術である。しかし、こちらも経験が技術を支える重要な要素を占めることや制作途中の形状変更が容易に行えず、制作における計画性が形を左右する技法でもあり、彫金と共に、どちらも保育者養成校での造形美術教育に導入するには難しい技法と言わざるを得ない。

そこで今回、採用したのは「鑄金」技法である。基本的な鑄金技法は、原型を制作し、その周囲を耐火物で覆い固める。原型を抜き取り、内側に均一な原型の厚みを作り、その隙間に溶解した金属を湯口と呼ばれる入り口から流し込む。その後、金属が冷却した段階で鑄型を割り、取り出した金属作品の表面を研磨するなどして仕上げる方法である。

鑄金技法は、日本古来の「真土（まね）型」、工業的な大量生産を可能にしたアメリカ型の「セラミックシェルモールド法」他などがあるが、今回の授

業には、筆者が文化庁派遣でイタリアに2年間留学した際に、其の地で修得した技法のひとつである「ロストワックス法（脱蠟法）」を取り入れることにした。

2. ロストワックス法

ロストワックス法は鑄金の中でも、作品表現の可能性が広がる精密鑄造法の代表的とされている。これら技術の歴史は紀元前までさかのぼることができ、細緻な蠟型鑄物は、エジプトや中国の古代遺跡からも出土している。この手法が発達したイタリアでは、現在でも多くの芸術家が蜜蠟（ビーワックス）をはじめ、粘土や石、木など様々な素材で元原型を制作している。それらの元原型は石膏職人や鑄物師など多くの専門的な職人の手を経由されながら、最終的にシルバージュエリーやブロンズ像などに変換され、芸術を支える工房分業制は、中世から今もなお続いている。

ワックスは彫金の地金に比べると極端に柔らかく、無理な力を入れることなく自分の思い通りの形状に加工することができる。金属では出しにくいボリューム感や流れるような曲線のライン、様々なテクスチャー（表面処理）なども表現できることが最大の特徴である。

近年では、素材の可塑性や可変性を応用し、硬質がゆえに切削が困難な金属素材や逆に軟質で鍛造や溶接が難しい合金も容易に成形できる技術の進歩とともに精密鑄造の需要は高まっている。

Ⅳ 授業実践の方法

ここでは、筆者が立案した『シルバーリングの制作』の授業について、制作の方法や展開についての詳細を述べる。

1. 準備

本授業は、4回の演習で構成されている。第1回目は、自由なイメージを平面であるスケッチとして描写する。第2回目は、平面のイメージを立体であるワックスに造形する。第3、4回目は、シルバーに変化した素材を手加工で宝飾品に仕上げる。である。

まず、学生には、授業ごとのタイムテーブルとその授業回での過去の学生参考作品などを紹介する。特に、過去の学生が制作した、第1次、第二次スケッチ、と完成作品を合わせて紹介することで、作者

が何をイメージし、どのような手順で形にしたのかを今回の支援プログラムにより美術室に完備された、プロジェクター他デジタル機器を利用し、分かりやすく映像で紹介する。制作上の難点や過去の学生が失敗した場面など、数多くの作例を示すことで、初めての学生が陥りやすいポイントを事前に指導し、これから制作する学生が作品完成までの工程を想像し、円滑な作業へと繋がっていくように方向付けをする。

次にシルバーリングの知識、歴史、鑄造、図面、スケッチの描き方などを記したプリントを学生に配布し、各項目を順番に音読させ、全員が内容についての共通理解を図る（図1）。

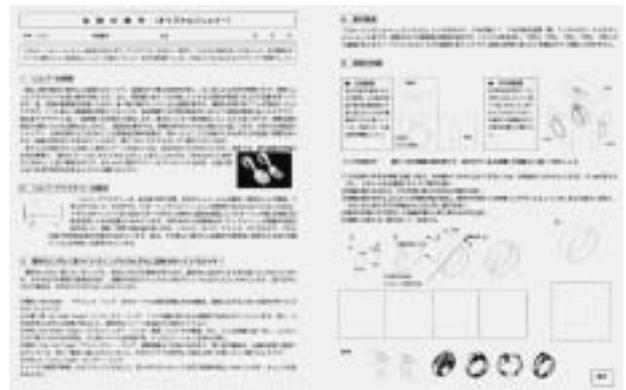


図1 授業プリント

2. スケッチ

(1) 第1次スケッチ（デザインスケッチ）

プリントに記した「平行投影図」を参照し、リングの形状を理論的に、かつ軽便にスケッチできるように指導する。プリントには描き方の手順が示されているが、多くの学生は美術に対する苦手意識を持ち、手先に自信がない学生も混在しているので、一項目ずつ、各机を巡回し、一人ずつ丁寧に指導する。

美術は、才能に左右されると考えている学生が多く見られるが、プロの音楽家や芸術家も反復の練習や訓練を積みながらイメージを形にしている事や、美術の技も水泳や自転車と同じように一度身体が覚えたと、時間が経過しても決して忘れることがない技術であることなどを例に挙げながら、学生を励まし指導する。

「平行投影図」の描き方をマスターした学生には、専用の用紙にデザインを考案させる。最終的に制作する作品は、1点のみであるが、学生は頭に浮かんだ形を容易に紙の上に再現する手法を習得したことで自信をつけ、少しずつではあるが、新しいスケッチを描くようになっていく（図2）。

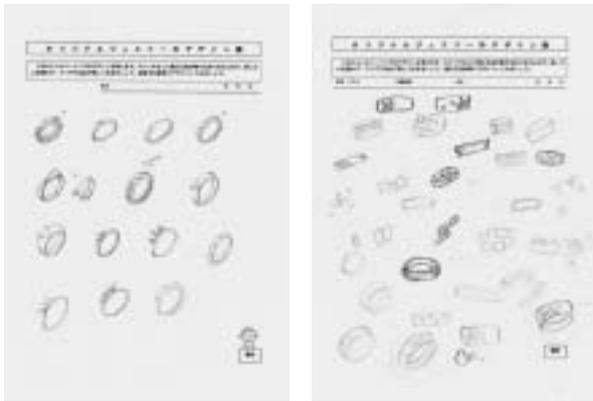


図2 学生によるスケッチ

(2) 第2次スケッチ (完成予想スケッチ)

1次のデザインスケッチの中から実際に制作したい3点を抽出し、詳細なスケッチを行なう。描いているうちに徐々に形が明確になっていく。その中で、一番気に入ったデザインを本番作品として制作するように指導する。完成予想図のスケッチを一人ずつチェックし、制作の方向性と留意点をアドバイスする(図3)。



図3 スケッチ中の様子

3. ワックスの制作

(1) 制作についての説明

制作過程のプリントを配布し、ワックス制作の流れを全員で読み上げながら注意点を確認していく。 casting silver types, Silver925 (SV925), commonly known as "sterling silver". The number 925 indicates that the silver content is 92.5%, and the remaining 7.5% consists of other metals (nickel, aluminum, etc.) to increase the strength of the silver alloy. Silver is a relatively soft metal among metal groups, so copper or other metals are added to increase its strength.

casting is specialized in jewelry manufacturing in the Tokyo district of Adachi, and is entrusted to (株) Anchi Bisho. Therefore, for students, it is necessary to grasp the price of their own work in advance. The specific gravity of SV925 is 10.36, so [wax weight × 10.36 = finished weight] and during the work, the wax is weighed with a scale and the weight is confirmed.

くよう指導する。

casting fee is linked to the silver market, but over the past 3 years, it has shifted within the range of 100 yen to 150 yen per 1g. The casting fee varies by the size of the design, and is considered a personal burden for students. The finished work is a mix of delicate and small pieces from the latter half of the gram, but some pieces exceed 10 grams in weight, and on average, the weight of the pieces is around 4 grams.

(2) 使用道具の一覧

Use the following tools. From bottom-left: reamer, coarse file, surgical knife (scalpel), file, small precision engraving knife, pin vise, grinding stone, paper file, gauge, top center, saw, top-right, electronic scale, bottom-right, finger sack (fig. 4). The reamer is a tool used to expand the hole in the wax.



図4 道具一覧

(3) ワックスの配布

The teacher checks the student's sketches and confirms the wax. The wax is cut into 8mm thick pieces. The wax used is silver ring wax (Felix wax, T1062 blue, melting point 104.5°C). The cutting of wax is an experienced task, so it is recommended that the teacher be prepared. Felix wax has three types of wax sold, but for beginners, soft wax is easier to work with.



図5 ワックス

(4) ワックスに寸法線を罫書く

指のサイズに合わせて、ワックスに白い修正ペンや油性マジックなどで寸法線を罫書く（図6）。罫書いた線に合わせて、ワックス中央の指なじみ穴の内側をリーマー、ヤスリなどで削り整形する。シルバーに铸造する段階で4～5%程度収縮するので、若干ゆるめに作る。



図6 寸法線をワックスに罫書く

(5) ワックスの側面を整える

カッター、メス、ヤスリなどの道具を使いながらデザインに近づけるように削る（図7）。ワックスの横幅を減らす作業には、机に粗目のヤスリや紙ヤスリを置いて削る。



図7 ワックスの側面を整える

(6) ワックスの細部を制作する

カッターなどで形を作ったら、ヤスリ（小）で全体を整えながら削る（図8）。細部のデザインは彫刻刀、穴はピンバイス（ドリル）などで彫り進める。細部に文字や模様を彫ることは難しいので、必ず何回か練習してから本番のワックスに挑戦させる。



図8 ワックスの細部を制作する

(7) 番号分けされた紙ヤスリで順序良く磨く

紙ヤスリは、粒度の粗い順から#100、#150、#240、#400、#600、#800に色分けしている。特に#100、#150、#240の傷がワックスに残らないように、ひとつの番手が終了する毎に教員のチェックを受けるように指導する（図9）。



図9 紙ヤスリで磨く

(8) ナイロン素材で磨く

最後はワックスの表面に傷が残らないようにナイロン素材などで磨き、傷の有無を確認して完成とする（図10）。

最終的な重量を計量し、記録する。各自記名したチャック付きポリ袋に入れて提出する。



図10 ナイロンで磨く

4. 铸造の手順

完成した学生作品を一括して铸造所へ郵送する。铸造所では、到着した梱包を開梱し、作品毎に破損の有無を調べ、細かい亀裂など、铸造に不適當な個所があれば修正する。デジタルカメラで撮影し、作品全てにナンバリングをする。多くの業者が依頼するために取り違いを未然に防止する安全策である。その後、ワックス原型に湯道を付けていく（図11）。次にゴム台に固定したセンタースプルー（铸造の中心となるワックスの太い湯道）に、湯道を取り付けたワックス原型を樹木の枝葉のように取り付けていく（図12）。これを、業界ではワックスツリーと呼んでいる。



図11 湯道が付けられたワックス原型



図12 ゴム土台に固定され完成したツリー

次にワックス原型を石膏に埋没させるために、パイプ状のフラスコと呼ばれる、鋳型リングをかぶせる（図13）。その中に、水で溶いた耐火石膏を上部まで注ぎ入れ、ワックス原型を埋没させる。そして脱泡機を振動させ液体石膏の気泡を除去する。



図13 フラスコに固定されたツリー

石膏が硬化したら電気釜に入れ、低温から徐々に温度を上げ、3時間ほど焼成する。石膏に埋没された原型のワックスは溶けて流れ、石膏の中には原型と同じ空間（隙間）が残る（図14）。



図14 焼成後の窯の内部

その鋳型を高周波圧力鋳造機内の下部に固定し、上に、カップ型の黒鉛坩堝（るつぼ）を設置する。坩堝には計量した銀地金を投入し、上部の黒鉛棒をセットする（図15）。



図15 高周波圧力鋳造機の内部

写真中央のらせん状の加熱コイルと上部から突き出た黒鉛棒で全体を加熱し、坩堝内部の地金を溶かす（図16）。その後、上部の蓋を閉め、一気に圧力をかけて地金を鋳込む。



図16 加熱中の坩堝

加圧が完了し、鋳造機内の圧力が大気圧に戻された後にフタを開け鋳型を除冷し、鋳造が完了した鋳型を鋳造機から取り出す（図17）。



図17 鋳型を鋳造機から取り出す

鋳型を水に浸し、石膏を洗い流して鋳造されたリングを取り出す（図18）。鋳造工程は、中3～4日で完了し、1週間以内に返送されるので、継続的な授業が可能である。



図18 鋳造された作品



5. シルバーの加工

鋳造所から返送されたリングを確認し、学生に返却する。鋳造の手順を画像で紹介し、手元の作品がワックスからシルバーになった経緯を学ぶ。

その後、シルバーの加工方法を説明する。まず、作品には、鋳造した時の湯道が残っているため、金属ヤスリで完全に削り落とす（図19）。次にサンドペーパーの#100から#150、#240、#400、#600、#800、#1000の順に研磨していく（図20）。特に#100～#400は、傷が残らないように丁寧に作業するよう指導する。彫り込んだデザインを研磨する時は、磨きヘラや真鍮ブラシを使用するとよい。#1000のサンドペーパーで研磨が終了したら、コンパウンドクリームで鏡面仕上げを行い、完成する。



図19 ヤスリで湯道を削り落とす作業



図20 サンドペーパーでの研磨作業

6. 学生作品

学生による様々なデザインの一例を紹介する（図21～30）。完成後、学生はお互いの作品を鑑賞し合う。



図21～30 学生作品

V 受講者の意識調査と考察

(1) アンケートの内容

これまで、シルバーリングの制作実践について述べてきたが、本稿の授業を受講した学生は、どのような体験として受け取り、どのような感想を抱いたのであろうか。制作終了時に授業に対する質問紙調査を実施し、授業の効果を探った。

本アンケート調査における被験者数は、幼児教育学科造形（佐善担当）受講者、平成20年度151名、平成21年度137名、平成22年度158名（欠席者を除く）である。調査時期は、各年度ともに授業が完了した5月下旬に実施し、授業内にアンケート用紙を配布し、記入後に回収した。

質問内容は、次の通りである。

- Q 1. 授業に意欲的かつ積極的に参加しましたか
- Q 2. この授業以前に、シルバー素材で作品制作したことがありますか
- Q 3. 今回のシルバーリングの制作はどうでしたか
- Q 4. 教師のアドバイスは、役に立ちましたか
- Q 5. 準備された材料や道具は、制作の役に立ちましたか
- Q 6. 満足度はどの程度か 5段階で評価してください
- Q 7. 今回の授業で一番印象に残っていることをひとつ書いてください（自由記述）

(2) 分析と結果

Q 1. 「授業に意欲的かつ積極的に参加しましたか」の質問に「意欲的かつ積極的に参加した」と回答した学生は、20年度82.8%（125名）21年度78.8%（108名）22年度88.6%（140名）であった。「普通」と回答した学生は20年度17.2%（26名）21年度21.2%（29名）22年度11.4%（18名）であり、「積極的に参加しなかった」と回答した学生は3年間を通じて一人も存在しなかった。大学に入学してから初めての授業であったため、このような結果になったものと思われる。3年間の平均では、8割（83.6%）を超す学生が、意欲的かつ積極的に授業に臨んでいたことが分かった（表1）。

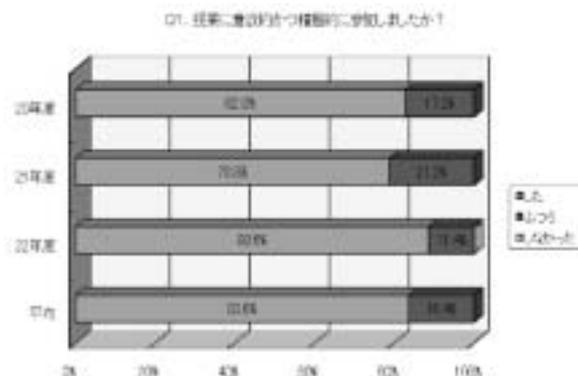


表1 授業に意欲的かつ積極的に参加しましたか

Q 2. 「この授業以前に、シルバー素材で作品制作したことがありますか」の質問には、「ある」と回答した学生は、20年度4.0%（6名）21年度7.3%（10名）22年度9.5%（15名）であった。4.0%～7.3%～9.5%と徐々に増加している状況は、P.2に前掲した純銀粘土の普及が考えられる。微増ではあるが、アクセサリーなどに興味を持つ層に受け入れられていることが推察される。逆に、「本授業以前にシルバー素材に触れたことがない」と回答した学生が、

平均で93.0%（415名）存在していることから、学校教育では味わうことの少ない素材であることも調査結果から確認できた（表2）。

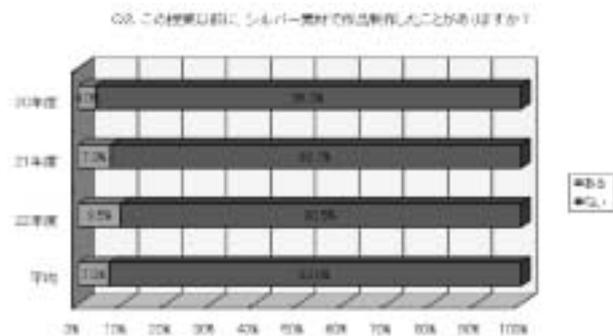


表2 この授業以前に、シルバー素材で作品制作したことがありますか

Q3.「今回のシルバーリングの制作はどうでしたか」に対する回答で、最も多かったのは「とても楽しかった」であり、20年度62.9%（95名）21年度66.4%（91名）22年度57.6%（91名）であった。次は、「楽しかった」と回答したもので、20年度35.1%（53名）21年度30.7%（42名）22年度41.1%（65名）であった。「つまらなかった」と回答した学生は、20年度0.7%（1名）21年度1.5%（2名）22年度0.6%（1名）の5名で、「どちらでもない」と回答した学生も、20年度1.3%（2名）21年度1.5%（2名）22年度0.6%（1名）の5名であった。

3年間の平均は、「とても楽しかった」62.1%（277名）、「楽しかった」35.9%（160名）、「つまらなかった」0.9%（4名）、「どちらでもない」1.1%（5名）となり、総じて学生が、楽しいと感じる授業であったことが確認できた。次回アンケートでは、具体的にどのような点が楽しかったのか、また、なぜ楽しかったと思うのか、などについても詳しく調査していきたい（表3）。

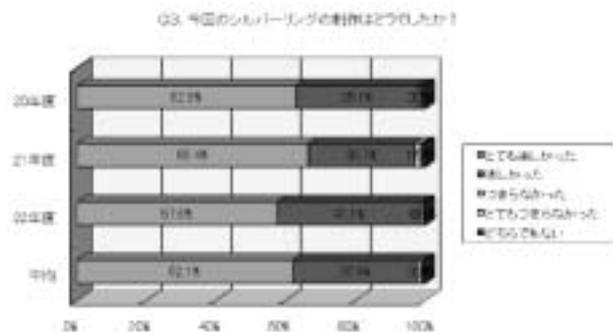


表3 今回のシルバーリングの制作はどうでしたか

Q4.「教師のアドバイスは、役に立ちましたか」については「とても役に立った」が、20年度70.2%（106名）21年度78.8%（108名）22年度75.9%（120名）

で、「役に立った」が、20年度28.5%（43名）21年度19.0%（26名）22年度22.8%（36名）であった。「どちらでもない」と回答したものが、20年度1.3%（2名）21年度2.2%（3名）22年度1.3%（2名）存在した。

「役に立たなかった」、「まったく役に立たなかった」と回答した学生は3年間を通じて一人も存在せず、概ね教師のアドバイスを受け入れ、制作に役立っていたことが確認できた（表4）。

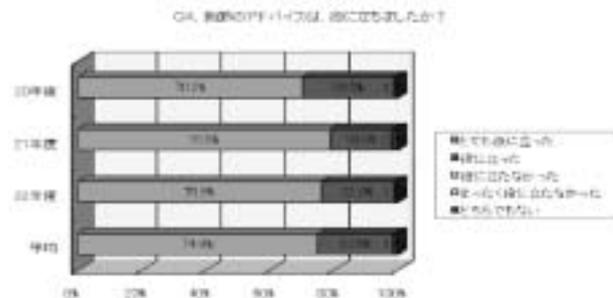


表4 教師のアドバイスは、役に立ちましたか

Q5.「準備された材料や道具は、制作の役に立ちましたか」については、「とても役に立った」が、20年度73.5%（111名）21年度94.9%（130名）22年度76.6%（121名）で、「役に立った」が、20年度25.2%（38名）21年度5.1%（7名）22年度23.4%（37名）であった。

「役に立たなかった」、「まったく役に立たなかった」と回答した学生は、一人も存在せず、適切な材料、道具の準備がなされていたと考えられる（表5）。

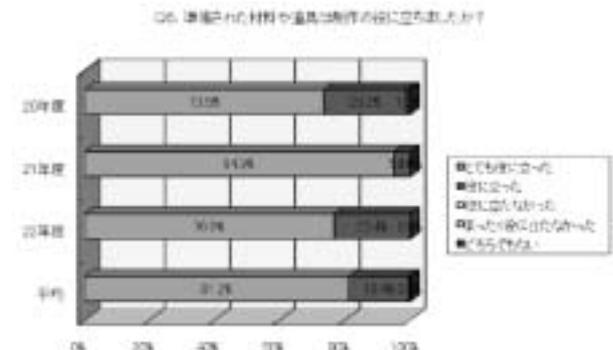


表5 準備された材料や道具は、制作の役に立ちましたか

Q6.「満足度はどの程度ですか 5段階で評価してください」では、「5」と評価したものが、20年度61.6%（93名）21年度59.9%（82名）22年度61.4%（97名）であり、「4」と評価したものが、20年度33.8%（51名）21年度35.8%（49名）22年度31.0%（49名）、「3」と評価したものが、20年度4.6%（7名）21年度4.4%（6名）22年度7.6%（12名）であった。

3年間を通じて「2」「1」と評価した回答はなく、平均でも6割以上が「5」と評価している。

「5」「4」を合わせると、平均は94.4%となり、総じて学生が満足している結果と言えるであろう（表6）。

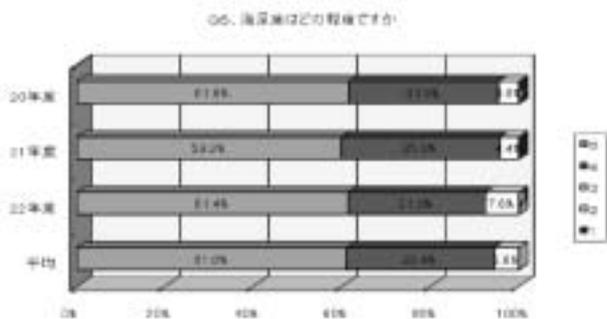


表6 満足度はどの程度ですか

Q7. 今回の授業で一番印象に残っていることをひとつ書いてください（自由記述一部抜粋）

（以下、原文のまま掲載）

- ・初めてだったから、とにかく楽しかった。
- ・たくさんのデザインを考えたことが良かった。
- ・自分の考えたデザインがちゃんと指輪になって、うれしかったし、楽しかった。
- ・一から自分で作ることが出来て、愛着も湧いたし、難しいところもあったけど、好きなデザインが出来て楽しかったです。
- ・自分で自由に考えて指輪を作るのは大変楽しかったです。
- ・シルバーリングを最後まで制作してみて、手作り感という感じを味わうのも面白かった。
- ・初めての経験に毎回ワクワクしていました。
- ・作りたいデザインで制作出来たので満足です。
- ・最初から最後まで自分の好きなようにやれて、売り物みたい。
- ・不器用な私が作ってもちゃんとした作品になった。
- ・ワックスだったのにあっという間にお店で売っているものと同じような物ができて感激しました。
- ・絶対失敗したくなかったから一生懸命やっていたら楽しかった。
- ・最初の工程から映像で見られて勉強になりました。
- ・プレゼントを考えていたので、相手の反応への期待感にドキドキして、本気で取り組めたから。
- ・自分だけの完璧なオリジナル作品を作るということで、作業にも集中して取り組むことが出来て楽しかったです。
- ・シルバーになる仕組みが分かって、たのしかった

です。

- ・一つ一つの工程が楽しかった。
- ・やれば、やるほどキラキラになる。
- ・ひたすら削ったり、磨いたりで大変だったけど、磨いたら輝きが出て、その時に面白さを感じた。
- ・自分が削ったワックスが、きちんと指輪になって帰ってきた時は感動しました。
- ・制作も道具も始めてのことばかりで、すごく楽しかったです。
- ・世界にひとつしかないリングを作れたので、嬉しかったし、完成した時の達成感が良かった。
- ・最後の仕上げのとき、頑張ってたかと思えました。
- ・色々大変なことはありましたが達成感を味わうことが出来ました。
- ・友達が喜んでくれたので、うれしくてあげました。
- ・リングって案外簡単に出来るものだったと思った。
- ・貴重な体験が出来て良かった。
- ・自分が頑張った分だけリングに反映し、自分の宝物になりました。
- ・本物の宝物になりました。キラキラしていて感動しました。
- ・普段使うものが作れて良かった。
- ・自分一人ではできなかったけど、先生のアドバイスは、いつも役に立った。
- ・失敗してデザインが変わっちゃったけど、先生がいいデザインだとほめてくれたのがうれしかったです。
- ・造形は苦手で不安だったけど、先生がすごく丁寧に教えてくれたので、楽しく制作することが出来ました。
- ・図工や造形は、あまり得意ではなかったけど、絵などではなくて、本当に楽しかったです。
- ・中学や高校は絵ばかりでつまらなかったから、立体は楽しめた。
- ・図工が嫌いだったけど、図工が面白く思えた。

自由記述を見てみると、「初めての制作についての感想」「自由にデザインし、現実のリングとなった驚きや満足感」、また、「作業を終え、作品が輝いた時の達成感」「教員の授業支援」「図工・美術に対する意識の改善」などの記述が占めていた。反面、「制作は、楽しかったが、指輪は使わないので他のものを作りたいかった」や「磨く作業が多く疲れた」「思い通りにならなかったの、ちょっとしょげた」などの授業に対する不満や内容の難易度を示唆する

記述も見られた。

VI まとめ

本研究では、保育者養成校の基礎技能である「造形」授業に、金工の制作を導入した実践的研究を検証してきた。まず、授業後の質問紙調査から読み取れることは、8割を超す学生が、授業に意欲的かつ積極的な態度で臨み、消極的な姿勢で授業に臨んでいた学生は、3年間を通して一人も存在していなかったことである。これは、学生の学ぶ意欲の指標でもあり、目的意識が高い保育者養成校の学生の特徴とも言えるのではないだろうか。

また、本授業に関しては、適切な施設、教材が準備されていることや、学生は教師のアドバイスを真摯に受け入れ、つねに学ぶ姿勢で取り組んでいることも数値の上で示された。

特筆すべきことは、授業の満足度を量る質問への回答である。3年間を通じて「2」「1」と評価した回答は存在せず、6割以上の学生が最高値の「5」と評価し、「5」と「4」の合計は94.4%であった。ここから、総じて学生は「シルバーリングの制作」授業に対し興味を持ち、内容にも満足していたことが確認できた。学生の自由記述からも「楽しい」「良かった」「面白い」などの回答が多く寄せられ、本学授業計画（シラバス）の目標欄に記した『「創作することの楽しさ」』『「表現することの素晴らしさ」』などを体感し、子どもの喜びに共感できる豊かな感性を身につける」ことの一環は、達成できたと言えるのではないだろうか。

しかし、本授業が、4週連続で構成されているために発生する欠席者への配慮が十分でないことや造形美術教育として作品を外部へ委託することへの意識の肯定など、今後も検討、改善していかなければならない課題があることも事実である。単に授業が、楽しいだけに終わらず学生たちの心に浸透することで、豊かな感性として開花し、次世代の子どもたちへ受け継がれていくことを信じてやまない。これからも美術家としての経験を生かし、保育者養成校の造形美術教育に新たな視点で臨んでいきたい。

謝 辞

最後になりましたが、本研究の趣旨をご理解頂き、快くご協力下さいました、(株)安池宝飾 安池省

三氏に感謝の意を表します。

また、本研究は、平成20年度に文部科学省より採択された「各大学等の特色を活かせるきめ細かな支援（教育・学習方法等改善支援プログラム）、課題名：『感性豊かな保育者を育成する造形教育拡充プログラムの実践的研究』」の助成によるものです。関係各位に心から感謝の意を表します。

- 1) 調査協力：岡崎女子短期大学幼児教育学科「造形（佐善担当）」受講者、平成20年度194名、平成21年度137名、平成22年度158名、合計489名
- 2) 拙稿「保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果—切り紙、染め紙を活用した造形指導の実践的研究—」、岡崎女子短期大学研究紀要第43号、pp.31-40
- 3) 山崎猛・金子一夫「児童・生徒の美術教育の意欲・意識の基礎研究（1）—図画工作科・美術科およびその各領域に対する意欲度」、茨城大学教育学部教育研究所紀要 第19号、1986年、pp.69-76
- 4) 降旗孝「教育現場における造形美術教育の実態と課題—山形県造形教育連盟実態調査からの考察—」、山形大学紀要（教育科学）、第14巻 第2号、平成19年2月、pp.141-158
- 5) 槇英子『保育をひらく造形表現』、萌文書林、2008年、p.15
- 6) 拙稿「岡崎女子短期大学平成22年度授業内容」岡崎女子短期大学、2010年、p.53
- 7) 前掲、『保育をひらく造形表現』p.15

参考文献

- ・古瀬政弘 「金工教材の開発—平成15年度公開講座を基に—」大学美術教育学会 pp.377-383
- ・杉本昌裕 「工芸・デザイン実習のための教材研究—金属工芸や金属素材を生かして」跡見学園女子大学文学部紀要 第40号、2007年、pp.83-100

図版出典

- 図1~10、19~30 筆者撮影
図11~18 (株)安池宝飾撮影